

ロシアと東欧諸国における日本文学の出版と翻訳の状況

Vladislav Nikanorovich GOREGLIAD(ロシア科学アカデミー東洋学研究所)

小論が扱う時期は、ソ連邦時代の最後の数年間と、ロシア及び東欧諸国の現状である。

小論で述べるのはこれらの国々における日本文学の研究、翻訳、そして日本文学教育の状況である。ソ連邦が存在した当時、学術研究の発展は国家と共産党によって統制されていた。いうまでもなく、これは日本研究にも及んでいたものであり、文学作品を翻訳するにあたっての作品選択も例外ではありえなかった。研究者は主として国立大学（モスクワ大学、レニングラード大学、ラウジヴォストークの極東大学）か、ソ連科学アカデミー付属の研究所（東洋学研究所のモスクワ本部とレニングラード支部、世界文学研究所等）に勤務していた。翻訳に従事したのは主に大学で教鞭を執る人々と、科学アカデミーの研究者であったが、日本専門家はそれ以外にもいた。

モスクワとレニングラードの東洋学研究の間には伝統的に勢力範囲が区分されていたが、それは小論が扱う10年間の以前から大きく壊れ始めていた。かつては、モスクワの研究者は現代を扱い、レニングラードの研究者は古典を扱うという原則が完全に守られていたが、1970年代に入ると、モスクワで「万葉集」、浄瑠璃本、井原西鶴と近松門左衛門の作品が翻訳され、「源氏物語」と「古今集」の研究書が出版された。一方、同時期のレニングラードでは戦後派の文学作品が翻訳された。レニングラードでは現在でも、文学研究のみならず、歴史、宗教、美術そして言語の研究においても扱う時代が大正時代以前に限定されている。これは学術研究が長年にわたって中央から指導を受けてきた結果である。原因は他にもあるが、紙面が限られているため、小論では立ち入った説明は行わない。

日本文学研究を行っている機関の数はこの10年間、ほとんど変化していないが、伝統的な機関の枠内で、才能ある専門家が何人も頭角を現している。現在でも日本研究家の数が一番多いのは東洋学研究所である。日本文学の専門家は同研究所のモスクワ本部とサンクト・ペテルブルグ支部（旧レニングラード支部）で古典及び現代文学の研究と学術翻訳にあたっている。

研究所の職員全員が毎年年末には自分の翌年の研究計画書（研究テーマによっては今後数年間の計画書）を提出する義務を負う。テーマは研究所自体の活動方針に沿っていなければならない。たとえば、東洋学研究所サンクト・ペテルブルグ支部が扱うのは東洋諸国の古典文化の研究であり、世界文学研究所が扱っているのは、各国の文学の特殊性と文学の国際的な関係性、つまり文学の類型論と互いに与える影響である。職員の研究計画書は研究所の学術協議会で承認された後、科学アカデミー幹部会で承認を受ける。それが、研究テーマに対する予算給付の根拠となる。そもそもこのような手順がとられるにいたったのは、同一テーマが、科学アカデミー傘下の複数の研究所で同時に取り扱われる事態をさけるためだった。

研究計画はすべての研究所でこの図式に沿って立てられている。

近年出版されたモノグラフが扱っているテーマは、日本文学の全般的な問題、日本文化におけ

る文学の役割、文学のジャンル分けという問題、日露の文学の交流と影響、および、個々の作家の作品研究である。いくつか例を挙げてみよう。N. I. CHEGODAR' 著「日本の戦後文学における人間と社会」(1985年)、A. N. MESCHERYAKOV 著「古代日本文化とテキスト」(1991年)、KIM, Rekho 著「ロシアの古典と日本文学」(1987年)、L. M. YERMAKOVA 著「日本の詩学的伝統の形成：その儀式的・神話的様相」(博士論文、出版準備中)、E. S. SHTEINER 著「一休宗純：中世文化の文脈における独創的人物」(1987年)、A. A. DOLIN 著「日本近代詩論」(1990年)、T. P. GRIGORYEVA 著「日本の美しさにはぐくまれて」(1993年)、M. P. GERASIMOVA 著「美の実在。川端康成の作品に見る伝統と現代」(1990年)、D. P. BUGAEVA 著「日本文芸評論家と記録文学者としての田岡嶺雲」(1987年)。

この時期には論文集も数冊出版された。モスクワ大学出版会刊「言葉とイメージ」(1990年)、ナウカ出版刊「日本。その思想、文化、文学」(1990年)もそういった本である。

L. M. YERMAKOVA の博士論文にはすでに言及したが、この8年間で日本文学を扱った少なくとも3点の博士論文と11点の博士候補論文が書かれ、それぞれ執筆者に学位が授与された。これら論文のテーマは：M. V. TOROPYGINA は「義経記」、N. V. SMIRNOVA は田山花袋の作品論、G. B. GRIGORYEVA は明治時代の政治小説だった。日本におけるツルゲーネフ、トルストイ、チューホフ、ドストエフスキーの作品というテーマ (E. E. MALININA, V. I. OZHOGIN, T. A. YURKOVA, E. B. SEMENYUTA) もあった。これら論文の内、何点かは単行本として出版され、何点かは抜粋の形で雑誌や選集に掲載された。

再版された作品もあるが、その内特筆すべきなのは、N. I. KONRAD が1920年代に行った重要な研究「実例と概要に見る日本文学」である。この本には、「古事記」から松尾芭蕉の「奥の細道」に至るまでの、文学発展の各段階の概要、個々の文学作品の分析、および文学作品の部分翻訳・紹介が盛り込まれている。再版された翻訳作品には、古典文学（「万葉集」、「竹取物語」、「落窪物語」、「枕草子」、「方丈記」、「問わずがたり」、「徒然草」、浄瑠璃本、井原西鶴の作品など）と民話も含まれている。

新たに出版された翻訳の中で特筆すべきは T. L. SOKOLOVA-DELUSINA による4巻本の「源氏物語」ロシア語版 (1991～1993年) である。モスクワおよびサンクト・ペテルブルグで出版されたものには、V. S. SANOVICH 訳の「百人一首」(1992年)、E. M. PINUS 訳の「古事記」(巻之一 (神話)) (1993年)、V. N. GOREGLIAD 訳の「蜻蛉日記」(1994年) がある。

これまでロシア語に翻訳されたことのなかった森鷗外と三島由紀夫の作品がそれぞれ単行本として出版された。森鷗外の生涯と作品を研究している G. D. IVANOVA は鷗外の短編集を単行本用にまとめた。年内には刊行される予定である。

雑誌と選集 (最近出版される選集は、大部分がミステリーかSF短編集である) への掲載以外にも、少なくとも15人の現代作家の中編および短編集が単行本として刊行された。翻訳者の中には経験豊かな教授陣もいるが (モスクワ大学教授 V. S. GRIVNIN など)、若手翻訳者も少なくない。詩集・歌集は「万葉集」から戦後の自由詩まで7冊が出版された。

ちなみに偽訳書が出版されたこともあった。一例を挙げると、一昨年には、最近発見された日本の中世初期の歌人というふれこみの、ルボコ・ショなる作者のエロチックな歌集が出版された。

ロシアでは古典文学の翻訳は、文芸翻訳と学術翻訳に伝統的に分けられてきた。通常、学術翻

訳は詳細な研究と広範な解説付きで刊行される。こういった出版には入念な準備が必要なので、出版社はいやいやながらとりかかったものだ。準備から出版まで何年もかかった。

この2、3年で状況は急激に変わった。その理由はコンピューター製版によって新たな可能性が生まれたからというよりもむしろ、新しいタイプの出版社が登場したからだろう。いまでは学術翻訳をより速く、高度な印刷水準を確保して、十分な部数で出版することが可能になった。

2年ほど前、熱心な東洋学研究者の小人数のグループが出版センター「ペテルブルグの東洋学（“Peterburgskoye Vostokovedenie”）」を設立した。現在までにこのセンターは雑誌「ペテルブルグの東洋学」を6号発行した。同誌に掲載されたものには、I. V. MELNIKOVA 訳の上田秋成と建部綾足の作品、V. N. GOREGLYAD 訳の「太平記」の巻之一、V. I. SISSAURI 訳「宇津保物語」の一部分、そして日本の古典文学関係の論文数点も掲載された。前述のように、単行本としては「蜻蛉日記」がすでに刊行されたおり、現在は森鷗外選集と「宇津保物語」の翻訳が印刷に入っている。

サンクト・ペテルブルグの出版社“Shar”は日本文学の翻訳を専門に扱う予定である。この出版社は1993年には「古事記」を出版した。今後シリーズで古典文学と現代文学を出版する予定である。

日本文学教育に関しては、各大学が、当然ながら、独自の教育計画を立てている。しかしすべての大学に共通するのは日本文学科で行われている講義の形態である。講義には一般講義、専攻講義、専攻セミナーの3種類がある。サンクト・ペテルブルグ大学では学生は大学での学習5年間で文学関係の講義208時間、日本文学関係の専攻講義748時間を受講する。学生の自習は学年末に書く論文と卒業論文の準備、執筆が主である。しかしながら、ここ3、4年、大学教育の抜本的改革が検討されている。もっとも、ロシアの学術研究が抱える最大の問題はすでにはっきりしている。それは、大学卒業者で、学術研究に従事することを希望する者がほとんどいないことである。だがこれは別途論じるべき問題である。

旧ソ連では日本研究はおもにロシア共和国内で行われていた。周知のように、新独立国家では日本文学研究は最優先課題とは言えないわけだが、それでも、日本文学研究の2、3の例をあげることが可能だ。

ウクライナでは1970年代から現代日本文学のウクライナ語訳が出版されてきた。翻訳の大部分は、物理学者のI. JUBの手になる。現在キエフ大学では日本語学習は行われているが、文学の講義および文学研究はいまのところなされていない。ラトビアでは過去数十年の間に現代日本文学作品のラトビア語訳が出版されてきた。長年翻訳をしてきたのがE. KATTAIである。氏はリガに図書館に司書として勤務するかたわら文学作品を翻訳してきた。氏より若い世代の翻訳者たちはモスクワ大学およびレニングラード大学の卒業生である。ラトビア大学では日本文学研究者の育成はいまのところ行われていない。

10年ほど前にレニングラード大学を卒業したR. RAUD教授はエストニアにおける日本文学研究の第一人者となった。RAUDはタリンの私立大学で日本文学を含めた日本学を教え、国立タルトゥー大学で日本文学の講義を受け持っている。また氏は鎌倉時代の歌論研究もおこなっており日本の古典・現代文学のエストニア語訳もおこなっている。エストニアでの日本文学研究はRAUD教授の才能と精力的な活動のおかげで始まったと、筆者は自信を持って言える。

ポーランドにおける日本の伝統文化、文学、日本語研究の長老である W. R. KOTANSKI 教授が先日国際交流基金賞を受賞した。このこと自体ポーランドにおける日本研究の水準の高さを証明している。ポーランドにおける日本文学研究の中心になっているのはワルシャワ大学である。1986年には同大学の KOTANSKI 教授が翻訳し、序文と注釈も付けた「古事記」が出版された。1993年には同大学の Ya. RODOWICZ 教授が翻訳し注釈も担当した謡曲 5 作品が出版された。同じくワルシャワ大学の M. MELANOWICZ 教授は現代ヨーロッパにおけるもっとも執筆量の多い日本研究者である。1994年だけでも、MELANOWICZ 教授が書き上げた本と論文の総量は約1500ページにのぼっている。

氏の文学関係の本には「6世紀から19世紀半ばまでの日本文学」、「20世紀の日本の散文」があり、谷崎潤一郎の短編の翻訳も出している。

MELANOWICZ 氏はシリーズ「日本文庫」の編者でもあり、同シリーズでは安部公房の小説を翻訳している。

チェコにおける日本研究にも長い歴史がある。チェコスロバキアの解体後、日本研究者の大部分はチェコに残った。プラハの日本研究者の主たる所属先は、カレル大学の極東学部、最近設立されたプラハの日本センター、プラハ言語学校、アジア・アフリカ・アメリカ文化博物館である。それぞれが狭い専門分野を持つにもかかわらず、日本研究者の多くが文学作品の翻訳をおこなっている。

もっとも精力的な翻訳者の一人、V. WINKELHOFEROVA 教授は川端康成、谷崎潤一郎、大江健三郎その他の作家の作品20点以上をチェコ語に翻訳している。V. WINKELHOFEROVA 教授の本来の専門は文学作品の翻訳と、広義の日本文化研究である。上田秋成、遠藤周作、井上靖などの作品を翻訳した今は亡き L. BOHACKOVA 教授は著名な芸術研究者だった。日本研究者たちが精力的に翻訳をしたおかげで、チェコ国民の日本文学に対する関心は深い。

カレル大学で日本研究を指導している K. FIALA 教授は言語学の視点から「平家物語」を研究している。K. KABELACOVA 教授は能楽を、Z. VASILJEVOVA 教授はプロレタリア文学を研究している。V. WINKELHOFEROVA 教授は NOVAK 教授と共同で「現代日本文学史」を出版した。

スロバキアの日本研究に関しては筆者は多くを知らない。ブラチスラワのコメンスキ大学で教えている人々は日本の現代小説を翻訳しているし、「古事記」のダイジェストの出版にもとりかかっている。

ブルガリアの日本研究は比較的歴史が浅いにも関わらずよく発達している。現在のブルガリアでは日本文学の研究は、ソフィアのクレメント・オフリドスキ大学と、ブルガリア科学アカデミー文学研究所で主に行われている。

日本文学の講座はソフィア大学には当然あるし、ワルナ自由大学にもある。もっとも精力的に翻訳を行っている一人、N. CHALYKOVA 女史は日本の歴史と経済の本格的な専門家として知られている。女史は日本の長編小説 6 点と短編 4 点を翻訳しているし、翻訳作品の序文も頻繁に書いている。

現代日本文学のブルガリア語訳を行っている人の数は多いが、古典の研究と翻を本格的に行っている人のなかで特に注目には値するのは、次の 2 名である。まずは、Ts. KRISTEVA 教授、

氏は「枕草子」と「問わず語り」をブルガリア語訳し、文学理論と文学史を研究している。KRYSTEVA 教授は10～14世紀の日本の散文を論じた本を出版した。現在教授は日本の古典文学における比喩の問題に取り組み、「枕草子」を研究している。

もう一人は B. E. TSIGOVA 教授である。1988年に出版された本「禅の美学と日本美術の伝統」は教授の興味対象の一部を反映したにすぎない。TSIGOVA が主に取り組んでいるのは能楽の研究である。今年出版された氏による世阿弥の「風姿花伝」の翻訳と綿密な研究がそれを裏付けている。